

## 自分の成長

15ff4337 山田大貴

### ①自分の成長と気づきについて

4月の頃は2年生になって何をやったりするか分からなくて不安だった。この1年を通してサービランニングが自分の中で大きな経験になった。私はのばす会という不登校の子などが来るNPOに行った。そこでは、不登校の子ども達に学習支援や余暇支援を行った。最初は不登校ということについて周りの人との関わりを持たない子どもが多いのかと思っていたがそうではなかった。普通に周りの子どもや私たちと関わっており、周りに関わることが苦手なわけではないということが分かった。また、不登校は学校でいじめられたりしたから不登校になったのではなく、学校に来るということをみんなに期待されるのが逆に負担になってしまって不登校になってしまう子どももいるということを知った。また、サービランニングや今回の研究を通してグループワークの大切さを知ることができた。意見を言ったりすることは元々苦手だったが、グループで調べ学習をしたり資料作りでどうしたら良いものが作れるのか話し合う中でお互いに意見を言い合えるようになった。また、グループワークを通して意見をお互いに言い合う中で、いろんな意見があり自分の考えだけではなくこうゆう考え方もあるのだということを知ることができた。そのようなグループワークで自分の学習意欲の向上や幅広い視野を持てるようになった。グループワークについて最初は大変なことだと私は考えていたがそうではなかった。お互いに意見を言いあうことでお互いにどのような考えがあるのか知ることができたり、グループワークをやることで多くのことを学ぶことが出せるのだと分かった。この1年を通してグループワークやサービランニングで地域の現状や他の人の意見を聞いたりすることで自分にとっての学びになり、前よりも福祉のことについて幅広い視野で考えられるようになった。

### ②活動を通して見えてきた地域や市民活動の現状や課題について

私は、サービランニングの活動としてのばす会で活動をしていた。主な活動として学習支援などを行っていた。そこで思ったことが不登校によって学校行かなくなってしまう時、周りの人との関わりが減ってしまうのではないだろうか。また、勉強がどんどん分からなくなってしまう、それもまた学校に行きにくくしてしまうのではないかと思う。しかし、のばす会のように不登校などの子ども達に対して学習支援などを行って子ども達にとっての居場所があることは大切なことである。また、日本福祉大学にあるアンビシャス・ネットワークによる学習支援や近くにある畑で実際に野菜を作ったりする畑体験などのばす会にいるスタッフ以外の人と勉強をする中で関わったり、勉強以外の活動もされている。また、のばす会のように不登校の子ども達の支援をしているところが増えれば、子ども達の生活の支えになったり将来への望みを持てるようになるのではないかと思う。しかし、のばす会で不登校の子どもを全員支援できるわけではない。場所もアイプラザ半田という場所の部屋を使わせてもらっており使える人数にも限界がある。また、お金がないということで今やっている活動以外に新しいことがあまりできないという課題がでた。NP

〇だけではお金を賄うことは難しいことであるということが分かった。NPOだけでお金を賄うのは難しいことであり、他の機関や企業など地域との協力が求められる。そして、学習支援などにおいてスタッフだけではみんな見ることはできず、子ども達にとって話す話題も少し合わないということも考えられる。今回サービスランニングで私は子ども達と関わってスタッフの前では見せない姿もあり、年が近い人と関わることで子ども達にとっていい刺激になるのだとわかった。なので、学習支援などで年が近い人と関わられるようにボランティアの募集がひつようなのではないかと私は考える。

## 非専門職の可能性：学生がつなぐ地域

FF153131：西中良樹

### 序文

はじめに、私の活動先である「NPO 法人子どもたちの生きる力をのばすネットワーク（以下、のばす会）」を紹介したい。のばす会の目的は『不登校、中退、引きこもり等に悩む子どもたち や若者に対して、それらに係る相談業務に関する事業を行い、生活及び学習に係る問題の改善や 解決を図り、自立心と主体性の確立及び向上、また心身の健康の増進に寄与すること』<sup>1</sup>である。具体的な事業としては、フリースクールを通じた居場所支援を行なっている。のばす会の活動では、学校に行くことのできない子どもたちと実際に対話をし、一緒に運動するなどの交流を行なった。実際に出会った子どもたちの年齢層は、10歳から15歳程度までだった。私は彼らとの交流から多くを学び、より良い人間になることができた。

### 自分自身の変化

#### ①不登校や引きこもりに対する認識の変化

一般論的に不登校や引きこもりは個人の問題もしくは責任と言われがちであるが、必ずしもそうだというわけではない。不登校や引きこもりになる子どもには様々な背景がある。例えば、相対的貧困の中で育ってきた子どもは学習塾に行くことができずに、学力に差ができ、学校に居場所を失ってしまう。他にも、発達障害がある子どもは周囲とうまく溶け込むことができず孤立、ひどい場合は虐めなどが原因で学校に行くことができなくなってしまう。このように、不登校や引きこもりになる子どもの背景は様々であるということを知った。子どもたちは必ずしも怠けで学校に行かないわけではない。そこには、社会の構造にある不備がしわ寄せされ、子どもたちが苦しめられている現実があった。このことを知るにつれて、自分の中にも誤解や差別意識があることに気がついた。

#### ②義務と責任の認識

サービスマーケティングを通して、社会に対して果たすべき責任と義務があるということ学んだ。社会に抑圧されている人や問題に目を背けるのではなく、自分も社会の一部だという認識のもとに人類をより良い方向に導く必要がある。被抑圧者の存在を否認したり、認知した上で何も行動しなかったり目を背ける行為は結局、自分の中の抑圧者の存在を容認するだけであると学んだ。常に社会に目を向け、より良い方向へ改善するというのを忘れてはならないと学んだ。

### 地域に対する提案

#### ①地域の問題点

地域の課題を解決するための NPO は多数存在する。これらの NPO が今後さらに積極的に行わなければならないことは連携である。

不登校や引きこもりになってしまう子どもには様々な背景があることは、不登校や

引きこもりに対する認識の変化で紹介した。その中で、貧困について紹介したが、これを実際に解決するためには様々な課題が発生する。その課題も、早急に対処しなければならないものと、長期的に対処しなければならないものの二種類に分かれる。早急に対処しなければならないものだと、食事の提供などである。これを解決するには、フードバンクや子ども食堂などが有効である。長期的な課題は、居場所の喪失や学力の低下である。これを解決するためにはのばす会のような居場所支援や、半田市の寺子屋事業などが有効である。貧困という問題一つを切り取っても多くの課題があることがわかる。

多くの取り組みなければならぬ課題の解決のために、地域の NPO 組織の連携が必要なのである。これまで述べてきたように、解決しなければならない課題が多い場合、一つの NPO では対処しきれないのである。理由として、職員への負担もあるが資金面でも多くの課題がある。NPO の資金面での課題は深刻である。

多くの NPO は助成金に頼っている。助成金とは、企業や行政が NPO などの組織をサポートするために出す資金のことである。一見、これだけを聞くと助成金を多く獲得すればいいと感じるが実際にはそういうわけにも行かない。助成金の獲得には、資料の作成などが必要であり、これらを進めるには職員への負担は増すことになる。加えて、助成金の獲得が多く獲得することになれば、助成金を出している団体の意向を NPO が行う活動の中に取り込まなければならず、NPO の自律性は奪われることになる。

## ②非専門職の可能性：学生がつなぐ地域

以上の課題を解決するために地域の中にある NPO を連携させる役割を学生が担う地域づくりを提案する。知多半島地域の課題を日本福祉大学に集め、地域の拠点としての大学という解決方法も合わせて提案する。この目的は、学生が NPO をつなぎ、大学が地域の拠点になることで、新しい価値観を取り入れやすい地域づくりを作ることである。最先端の考え方を現場で実践しやすい環境を整えることができる。

プロセスとしては初めに、学生が実際に地域の中に、サービスラーニングを通して入り、そこで発見した課題を大学に持ち帰る。次に大学にいる研究者やスーパーバイザーと共に解決策を模索する。最後に、解決策を地域に提案する。この時、課題を解決するのに必要な団体に同時に提案し連携を促す。こうすることで、NPO は連携先を探す手間を省くことができ、負担を軽減することができる。取り組みなければならぬ問題も減ることで、活動の焦点も一点に絞ることができ、活動資金にもゆとりができる。この結果、NPO の活動目的は明確になりそれらが連携することで、地域全体で問題を解決しようとする環境を作ることができる。

## 引用

1 : <http://www.japan-net.ne.jp/~a-itoh/about.html> (1月1日観覧)

## 現場から学んだ現状と人々の思い ～子どもたちの居場所を守るために私たちができること～

15FF1473 北郷 希望

### 1. 自分の成長と気づきについて

サービスマーケティングを通し、私はコミュニケーション能力や、学んだことをさらに考え深めていく力がついたと思う。具体的には、NPOの職員の方やNPOを利用している子どもとの交流で自分の知らない世界を知ることができた。たとえば、地域には不登校の子供がいて、その子どもたちを支える団体があること。また、NPOを運営するうえでの困難や現状、創業者や職員の方々の思いなど、現場に行かないとわからないリアルな部分を知った。市から教室を借りたり、助成金を頂いたりしているが、それでも運営をするにあたって資金面で困難な場合があるとおっしゃっていた。また、のぼす会の代表や職員の方々から直接お話を聞かせていただき、子どもたちへの思いやのぼす会の現状などに対する理解をする機会にもなった。

他にも、利用している子どもとの適切な距離感について経験を通し学ぶことができた。サービスマーケティング先のNPO法人子どもたちの生きる力をのぼすネットワーク（のぼす会）は、不登校の子どもに対し居場所と学習の場の提供をすることが主な活動である。そこで、子どもたちと関わる際に、子どもから家庭の事情や悩みの相談は深くまで聞かないことを言われた。なぜなら、のぼす会にはカウンセラーなどの専門家はいないため、のぼす会は治療をする場ではなく、子どもたちの居場所としてあるためからだ。また、私たち学生は子どもたちとの年も近いいため様々なことを話しやすい。そのため、関係が近づき過ぎてしまうのも避けなければならない。そのための関係の築き方も学ぶことができた。

さらに、サービスマーケティングで学んだことについてゼミのメンバーと考えを深め研究を進めた。そこで、経験を通して学んだことを、文献や他の人の意見に刺激を受けながら自分の考えを深めていった。そして、研究内容を報告会で私たちが学び、考えたことを発信することで、社会に残された課題を様々な人に共有ができた。また、報告会では他のメンバーの研究内容から自分知らなかった支援団体や社会の課題を知り、理解を深める機会にもなった。以上のように、様々な人々と関わり、たくさんの経験をしていく中で、私は利用者との関わり方や適切な距離感を知り、運営する職員の方々の思いや組織の現状や課題を間近で見学した。また、他の学生から自分とは違った考え方や、他の団体や分野での課題を知ることができた。そして、学んだことを経験や文献を活用しながら研究し、これからの課題に気づくことができた。

### 2. 活動を通して見えてきた地域や市民活動の現状や課題について

活動を通し、見えてきた課題がある。それは、組織を運営するうえで資金面が厳しいこと、職員やボランティア不足によりニーズに対応できない場合があるということだ。のぼす会では、市から教室を借り、助成金もあるが、現状ではやはり資金面が厳しい。また、職員やボランティアの人数不足などの理由から、のぼす会に参加したい親子がいても受け入れができない現状である。

以上の問題を解決するには、様々な支援を多面的に行うことが必要である。資金面での困難は、地域の人たちや企業などからの支援金を募ることが考えられる。そのためにも、多くの人に、様々な理由から学校へ行くことができない子どもたちについて理解してもらうことが必要だ。また、職員やボランティアの人数不足も、先ほど述べたように地域住民に不登校の子どもたちがいて、その支援をする団体があるということを知り、現状を理解してもらうことで、職員やボランティアを志望する人も出てくるだろう。そのためにも、社会に発信することが必要であると考え。つまり、抱えている問題を社会に発信し、多くの人に理解されることが重要であると思う。

また、のばす会では障害を持っている子どものフリースクールの受け入れが難しい。職員も専門的な知識がないため、障害がある子どもが発作を起こした時の対応などの責任を負うことが難しいという面があるからだ。このような問題のためにも、他の団体との連携が必要となる。

以上のように、資金面や職員・ボランティアの人数不足、子どもの受け入れの幅を広げるために、周囲の理解を深めるため発信していくことと、残された問題を解決するために様々な団体と連携することが今後の課題となるだろう。

# 責任を持つということ

15FF3206 野村菜歩

## 1. 成長と気づきについて

この一年の活動は主にサービスマーケティングが多くを占めていた。私が行った活動先は『子どもたちの生きる力をのばすネットワーク』という不登校の子どもたちが学習や好きなことをするための居場所として活動を続けているNPO団体である。のばす会で活動をしていく中で、気を付けなければいけないことや気に留めておかなければならないことなどが多く感じた。相手の子どもの本心を尊重しつつ、会話の中に配慮を忘れないということ念頭に子どもたちと接するようにしていた。その中で、自分の発した言葉やとった行動に責任を持つということを本当に自分が責任を取らなければいけないのだという心境で活動していた。このことから、サービスマーケティングでは学外の活動ということも伴って自己に対する視点が開いたものになったように思えた。自分の心の中で考えたことを客観視しながら責任の持てる行動をきちんととれているかどうかを把握してからその場に出すということをサービスマーケティングという実践を伴いながら学んでいけたのだと考える。これが、4月の自分と比べて成長できた部分の一つとして取り上げることができる。

二つ目に挙げられることは、サービスマーケティングという他団体と一緒に進めていくという企画のなかで必ず必要となってくる力、伝達力である。どんな些細なことでも気になったなら再度確認しあうということや、あらゆる事態や流れを予想し事前に物事の流れをある程度まで想定しておくというトラブルを防ぐこと、このようにメンバー間でももちろんいろいろな確認が必要となる。社会にでて守るべき基礎として位置付けられるこの伝達力をサービスマーケティングでは必要とされる機会が多く存在した。なので、二つ目の成長点としてはこのことが挙げられる。

どちらも、活動中に自然と行動に移したという点では同じである。このほかにも自分の心の持ちようの面や考え方の微細な変化など気づいた、又は改めるきっかけになった体験を多くさせてもらえる機会をもらったと感じる。自分が感じた成長の中では挙げた二つの存在が大きく感じられたが、また他の人から見れば印象も変わってくるのだろう。このように自分でも成長が感じられるということは実りのあるサービスマーケティングになったと思ってもよいだろうと考えている。

## 2. 地域や市民活動の現状・課題

市民活動の現状・課題については、のばす会では教師・講師経験のあった人たちが主にボランティア精神で教鞭をとっている。のばす会を通してしてみると、人材ではアンビシャスネットワークというわが校の学習支援団体も参加して学習支援を行っている。場所については、市の援助などでスペースを借りることができている。金銭面に関しては、お話を伺っていると精一杯やりくりをしてなんとか切り盛りしているという印象を受けた。市民活動の点では、現在は学習支援のみ学生たちが取り組んでいるが遊びの部分でもボランティアがいた方がありがたいと職員の方はおっしゃっていた。一般参加で募集をかけるよ

うな活動とは違うのでここは学生ボランティアの促進を進めていくことがこの先の活動に繋がってくると考えられる。対象が子どもであるということから少しでも年齢の近い学生たちと子どもたちで遊ぶだけでずいぶんと反応が変わってくると職員方が思うだけあって同年代というものはそれだけで安心できるひとつの材料的存在なのだろう。そして、場所に関しては今は建物のスペースの一角を貸してもらえているからいいものの返上することになれば活動自体が立ち行かなくなってしまう場合もあるのだ。このことから、はじめはNPO 団体は資金面が重大な悩みの種だと思っていたがその他にも借りる場所があるかどうかというところの方が活動存続のためにも重大になってくるということがわかってきた。お金があったとしても用途によっては部屋を借りることができない場合も当たり前のように存在するだろうと考える。活動拠点が必須な団体にとって場所問題は自分たちが考えているよりもっと深刻な問題なのかもしれないとサービスマーケティングを通して感じた。人材は足りなくても活動を続けることはできるが、場所がなくてはいくら人材が多かったとしても活動ができない。当たり前のことなのだが、資金面を危惧するあまり大事なことを見落としてしまっていた。これもまた、こうして活動する中で気づけたことの一つである。

### 3. まとめ

この活動の中で、一番心に残った言葉がある。それは、職員さんの『本当の目的はこの場所をなくすこと、これを忘れてはいけない。』というものである。一緒に活動させてもらってきた中で少し程度だが、職員さんたちが一生懸命この場所を存続することを頑張っていると感じる場面がたくさんあった。けれど、本当の目標はここに通っている子どもたちみんなが学校に行ってこの団体がいらなくなることなのだというのをのばす会さんは私たちに教えてくれた。団体を存続することだけが目標ではなく最後まで面倒を見るというのばす会さんの姿勢に意思の重みを感じた。サービスマーケティングをすることにより、NPO 団体を内側の考えから捉えることができる、これは今後の自分の人生にどのように関わってくるかは分からないが今回で得た経験は学生生活の中でも有意義なものになったのではないだろうかと思った。